

令和 元年 5 月 13 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17381

研究課題名（和文）大学生の東南アジア留学の構造とその機能に関する実証的研究

研究課題名（英文）Structures and Functions of Japanese Study Abroad in Southeast Asia

研究代表者

星野 晶成 (Hoshino, Akinari)

名古屋大学・国際機構・講師

研究者番号：40647228

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：東南アジア海外留学プログラムのステークホルダーを「国」、「大学」、「学生」の三つの階層に分けて、それぞれが海外留学プログラム開発・実施にどのように関わり、東南アジア留学プログラムが成立しているのかを明らかにした。具体的には、それぞれの立場が異なった意図と効用をもちながらも、それぞれの思惑を最大限に生かそうとしていることで、東南アジア留学の拡大が起きていることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人大学生の新しい海外留学の構造と機能の一端を明らかにしたことで、現在の日本人の「海外留学政策」の1つの課題として認識されている以下への貢献が考えられる。企業が欲している人材像（長期的な海外留学経験を持つ学生）と実際大学が輩出している卒業生（短期間の海外留学経験のみ）の間で人材育成の乖離が存在している（総務省、2017）。本研究の結果が、この乖離を是正し、かつ「日本人の海外留学促進」や「グローバル人材育成」政策の運用や効果検証の一助となるように、引き続き多角的に研究成果を発表していきたい。

研究成果の概要（英文）：Policy initiatives related to “internationalization of higher education” and “global human resources” are currently active in Japan. As one of means to achieve this goal, many Japanese universities have developed study abroad programs for their students. In this article, setting up a research question: “How are ASEAN study abroad programs at Japanese universities developed?”, I interviewed university officials at 4 different types of universities as case studies, along with related literature research. As a result, This research implies that ASEAN study abroad programs are developed because each stakeholder of the universities, with different roles and purposes, has made his/her own decision as the best choice to seek his/her benefits. To explain this, the author uses not only the push-pull factor theory, but also the rationale choice theory.

研究分野：高等教育の国際化

キーワード：高等教育の国際化 海外留学 グローバル人材 ASEAN

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

今日の経済の国際的相互依存関係の深化、情報通信技術の長足の進歩、そして知識基盤社会の台頭は、高等教育のあり方、及び大学生の人材育成方法に大きな影響を与えている。これに伴い、近年の国境を越えて教育を求める国際学生移動(主に海外留学派遣・受入)の増大は著しい。そして、海外留学を活用する個人の問題だけではなく、高度人材を育成し、確保して国益に繋げようとする各国の高等教育政策施行が活発化している背景がある。

この世界的動向とは逆行して、文科省の統計では、日本人海外留学者数(主に学位取得目的)は年々減少し続けている(H16年度は82,945人、H23年度は57,501人)。この減少は少子化、若者の「内向き化」、そして経済的不況等が一般的な理由とされている。その一方で、日本学生支援機構(JASSO)が公表している日本の高等教育機関に在籍したまま中短期間(数週間~2年間未満)で海外留学する日本人大学生は、上述の減少傾向とは反対に増加傾向にある(H22年度は42,320人、H24年度は65,373人)。また、近年経済的発展の著しい東南アジア諸国に留学する大学生の情報も新聞や雑誌等を通して多く入ってくるようになった。

この事実にもとづいて、申請者はH25年度から2年間、科学研究費(挑戦的萌芽研究)の支援を受けて、「グローバル人材育成におけるASEAN留学の必要性とその方策研究」をテーマに、大学生の東南アジア留学に対する意識調査、同留学の教育的可能性、及びその教育教材開発を研究して来た。この研究成果の一部として、大学生の東南アジア留学は急増(H22年度は1,879人、H24年度は5,312人)していること、同留学者数の約8割が1ヶ月未満の滞在であること、そして、タイとフィリピンが大学生の主要受入国であることを明らかにした。その一方で、学部生への調査からは、「英語の訛り」、「生活水準」、及び「安全面」の点から東南アジア留学を選択しない傾向が高いこともわかった。この成果で興味深いことは、統計では増加傾向にあるものの、大学生個人に焦点をあてると必ずしも東南アジア留学に積極的ではない相反する結果が出ていることである。つまり、今日の大学生にとっての東南アジア留学は、その意義と位置づけが混沌としている過渡期にあり、それ故に潜在的課題を含んでいることを示唆したと言える。

### 2. 研究の目的

本研究は、大学生の東南アジア留学の構造や機能を明らかにし、その実態と課題を考察することである。そして、日本におけるグローバル人材育成方法などを含む高等教育政策提言の一助にすることを目的とする。具体的には、ASEAN10カ国で実施されている海外留学プログラムに焦点をあてて、これらプログラムの開発・運営をする大学教職員に対してインタビュー調査を実施する(当初は学生を対象にして研究を進めていたが、研究計画を変更した)。この結果をもとに、なぜ大学がASEANへ海外留学プログラムを開発するのか、どのように開発されているのか、そして、どのようなプログラムに類別されるのかを明らかにして、同留学の構造と機能を説明する。

### 3. 研究の方法

これまでの先行研究は、海外留学のステークホルダーであるマクロとしての「(国)政府」とミクロとしての「参加学生(個人)」を中心に研究がなされてきた。しかしながら、教育政策施行と自大学生の需要との中間に立ち、大学が「どのようにプログラム開発・実施をしているのか?」というメゾレベルに着目した大学個別の動態はよく知られていなかった。そのため、「大学の国際化」の3ステークホルダーの現状を踏まえた深い議論を行う基盤が整っていないことが指摘できる。また、理論的議論については、「学生」の留学動機に関するプッシュ・プル要因が多様に用いられるため、この枠を超えた新たな議論発展が現時点で確認できない。これらが原因となって、現在進行する海外留学の「多様化」、「短期化」、「カリキュラム化・大衆化」を分析し得る十分な知識が不足し、関連教育政策の効果検証や評価に精度を欠く状態となっている。よって、「大学」の立場からの知見を蓄積し、新たな理論的考察を試みることは、「大学の国際化」の3ステークホルダーの関係性を新しく捉え、「海外留学」研究をより多角的に捉えることができると考えた。

文献調査と事例研究としての4大学の関係者へのインタビューを実施した。必要な文献データとして、日本の政治、経済、教育に関連する政策文書、そして、各大学に関連する文献を収集した。前者に関しては、日本とASEAN諸国関係する政治・経済的動向、そして、日本の「大学の国際化」や「グローバル人材育成」に関係する文献である。後者は、調査対象4大学の国際展開・戦略に関する方針や文部科学省の競争的補助金事業等の申請書や報告書、また海外留学プログラムに関する文献である。事例研究は、以下の3点の基準から対象大学を選出した。

- 2010年以前からASEANへ一定数派遣実績がある大学とそれ以降急激に増加している大学
- 文部科学省の「大学の国際化」や「グローバル人材育成」等の「日本人大学生の海外留学推進」の競争的助金を獲得している大学
- 設置形態、規模(人数等)、所在地、研究・教育機能が異なりバランス取れる大学

上記基準をもとに、まず3大学を選出した。創価大学(253人)、芝浦工業大学(240人)、名古屋大学(234人)である。さらに、2010年以前から定期的にASEAN海外留学派遣の実績があり、比較的設立年が浅く、小規模、地方都市という要素を加味して、立命館アジア太平洋大学を4つ目の事例大学として選出した。インタビューは、2017年8月から2018年5月にかけて、国際業務に携わる関係部署の管理職(副学長・センター長・部長・課長等)と実務担当教員、そして係長以下の実務担当職員を対象として、4大学合計29人に半構造化インタビューを行った。インタビューは、各教職員が担当するASEAN海外留学プログラムの開発・実施に関する内容(経緯、動機、障害、学内調整・プログラミング等)について筆者が対面で聞き取り、1人当たり60~90分程度行った。内容は録音し、後日文字データに変換した。文字データに変換した内容はデータ分析ソフトウェア(ATLAS.ti)を使ってコーディング作業を行なった。

#### 4. 研究成果

研究成果としては5.で記載する通りである。海外留学プログラムのステークホルダーと言える「国」、「大学」、「学生」の枠組みをもとにして、学会発表や論文掲載を残した。また、積極的に国際学会での発表も行った。

例えば、5.で示す、

星野晶成(2018)「日本人大学生の海外留学の変容 -名古屋大学のASEAN海外留学を事例に-」『異文化間教育』48, 53-71

では、

日本からの海外留学を日本人大学生に焦点を当てて概観し、とりわけASEAN海外留学を事例として近年の海外留学の動向を考察するとともに、概念的枠組みを立てて分析した。日本からの海外留学は、2000年代前半頃まで主流であったLong-term Mobility、Vertical Mobility、Spontaneous Mobilityの組み合わせで海外留学する人数は減少している。反対にASEAN海外留学のようなShort-term Mobility、Horizontal Mobility/Other Mobility (Vertical Mobilityと逆のベクトル)、Spontaneous/Organized Mobilityの組み合わせの海外留学が支持され始めており、新しい動向として確認できた。

また、ASEAN海外留学の動向について名古屋大学の事例を取り上げて分析することで、これまでの国際協力支援と地域研究中心の内容と異なることもわかった。10日間~2週間程度の滞在中でASEAN諸国の抱える諸問題を学術専門分野と関連させて現地大学生と共修しつつ、「グローバル人材」に関連した日本人大学生の態度を養成する、新しい海外留学とみなせる。この動向を指摘することで、これまでの「先端知識・技術」、「外国語」、「異文化理解」を規範とした海外留学目的・概念の再構築の必要性も示唆した。

一方で、これまでの海外留学と対比する意味でASEAN海外留学を取り上げたが、本研究の事例が4大学に限られるため、分析としてはまだ非常に限定的である。例えば、国立の理系分野と研究に強みを持つ名古屋大学が、教育系私立大学のASEAN海外留学プログラムとは異なることは容易に想像できる。実際、他大学では、ASEAN海外留学(特にフィリピンやマレーシア)を英語学習の機会として活用する事例も散見されており、本研究の事例にはそれに該当するプログラムは少なく、分析することはできなかった。今後は性質の異なる大学のASEAN海外留学プログラムを事例研究していくことで、さらに日本からの海外留学の概念研究の精査が可能となり、海外留学の全体像が明らかになっていくと考える。

#### 5. 主な発表論文等

星野晶成(2018)「日本人大学生の海外留学の変容 -名古屋大学のASEAN海外留学を事例に-」『異文化間教育』48, 53-71

中西啓介,若林真美,榊原久孝,入山茂美,浅野みどり,里中綾子,星野晶成(2018)「分野横断型プログラムにおけるミャンマー海外実施研修 -どのようにミャンマー研修は成立したか-」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』5, 33-41

Akiyoshi Yonezawa, Akinari Hoshino & Sae Shimauchi (2017) "Inter- and intraregional dynamics on the idea of universities in East Asia: perspectives from Japan", *Studies in Higher Education*, 42:10, 1839-1852

岩城奈巳,星野晶成(2016)「Nagoya University Overseas Take-off Initiative -海外事務所を活用した海外短期研修促進の取り組み-」『留学交流』60, 36-43

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Akinari Hoshino(2018) "The Japanese government initiatives for internationalization of universities and high schools: -current status and challenges-", 16th Asia Pacific Conference

星野晶成 & 川平英里(2018)「海外留学の学びとプログラミングを考える」, 第5回 BRIDGE

Institute-国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ-,  
Akinari Hoshino & Nami Iwaki (2017) "Expansion of Outbound Study Abroad in ASEAN Countries  
-Focusing on Historical Transformation and Case Studies of Nagoya University-", 22nd Japan  
Association of International Student Education  
樋口謙一郎, 星野晶成 & 田中光晴 (2016) 「「留学研究」の提唱：日本における現状と課題」,  
The 11th International Symposium for Japanese Language Education and Japanese Studies ,

〔学会発表〕(計 4 件)

〔図書〕(計 0 件)